

---

# 迷宮のストラテジー 1

堂餓鬼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷宮のストラテジー 1

### 【Zコード】

Z5964E

### 【作者名】

堂餓鬼

### 【あらすじ】

大学2年生の藤森真治は、とある事件に巻き込まれる。その事件というのは、友達をも裏切る悲しい事件だった。果たして、真治は、事件を無事解決出来るのか？

## 第1話・平成のシャーロック

### ホームズ誕生

俺は、太陽の光が眩しくて目を覚ました。時刻は、朝の6時15分だった。普段より早く、起きてしまった。

俺は、目を擦りながらベットから這い出て、顔を洗った。目が覚めた所で、大学に行く準備を始めた。準備を始めようとしたが、ある事に気付いた。

「そつか・・・今日は、日曜日で大学は、休みなんだ。早く起きて損した。」

大学に行く準備を止めて、俺は家の近くにある喫茶店に、足を運んだ。その喫茶店は、かなり広くて、料理の味も、決して悪くはない。家から近い事もあってか俺の行き付けの店になっていた。

客も結構入っていて、繁盛しているみたいだ。殆どが、男の客なのだが・・・その客の狙いは、つい最近、この喫茶店で働きだした女の子のようだ。

意外に、人気がある。俺は、店員に席を案内してもらい、コーヒーを注文した。

1分と掛からない内に、コーヒーが運ばれてきた。コーヒーを運んできたのは、人気のある店員だった。

「最近、よく来てくれますね。」店員は笑顔で、話しかけてきた。

「家が、近いからね。」

俺も、笑顔でそう答えた。

見た所、歳は同じ年位に見えた。楽しい一時が過ぎ去っていく。この時俺は、まだ身近で事件が起きるという事は考えもしなかった。そして、その事件を自らの力で解決するという事も・・・。平日の午後、大学が終わり、行き付けの喫茶店に足を運んだ。俺は席に着き、「コーヒーを注文した。その時、喫茶店にあるテレビのニュースが、目に飛び込んできた。

そのニュースとは、一人の女の子が誘拐されたと言うものだった。

なんと、その女の子はここで働いている『鳴瀬美紀』だった。

ニユースには、まだ続きがある。犯人は、【美紀】を誘拐して、身代金 1億円を要求していると言う。俺は、急いで彼女の住所を調べ、彼女の家に向かつた。彼女の家に着き、チャイムを鳴らした。

何回か鳴らしていると、家の住人が出てきた。

家を出てきた人を見て、俺は驚いた。なんと、家から出てきたのは、誘拐された張本人だつた。彼女も驚いたらしく、目を丸くしている。

「どうしたの？」

「いや・・・どうしたのって言つか・・・」俺は、言葉に詰まる。

「君は、大丈夫なのか？」

「何が？」 「いや・・・何がじゃなくて・・・。」

「・・・？」

「今ニユースで、君が誘拐されたって

「へ・・・！？」

「だつて・・・私ここに居るよ？」彼女は、困惑氣味だつた。勿論俺自身も困惑していた。さつきまで、誘拐されたとされる張本人が、俺の目の前に立つてゐるのだから・・・。俺は彼女の家に上がり、彼女と二人で頭を捻らし、考えた。・・・が、中々解らない。

何故、彼女が誘拐された事になつてゐるのか。二人が考えを巡らせてゐる時に、一本の電話が掛かってきた。緊張が走る・・・。彼女に、出るよう促した。彼女が、腰を上げ受話器に手を伸ばし、電話に出た。

「もしもし・・・？」彼女が電話に出た瞬間、彼女はホッとしたような表情になつた。

電話が終わり、彼女はまたソファーに腰を下ろした。

「誰から？」俺は彼女に、聞いた。

「私の友達のお母さん」彼女は、答えた。電話の内容は、彼女の友達が帰つてきていなが、何処に居るか知らないか?と言つものだつた。

彼女は友達に、電話を掛けた。一向に繋がらない。終いには、

留守電になつてしまつた。彼女は、段々不安になつてきていたみたいだ。

「彼女が誘拐されたニュースと、友達の行方と、何か関係があるのか・・・？」俺は彼女に聞いてみた。

「最近、【美紀】の周りで何か起こらなかつたか？」

彼女は腕組をしながら、何やら考へているようだ。彼女が、何やら思い出したように『あつ』と言つた。

「何か思い出した？」 「うん。昨日なんだけど、私の家に電話が掛かってきて、一億円用意しろって。用意出来なかつたら、娘の命は無いって。」 成る程。俺は、口を開いた。

「恐らく友達は、【美紀】に間違えられて、誘拐されたんだ。」

「えつ！？」 彼女は、驚いた表情をした。

「恐らくはな」 もう一度、呟いた。

「でも、どうして私と間違えて誘拐されるの？」

「多分それは、友達が君の家に居たからだろ。だから、犯人が君と友達を勘違いして、誘拐してしまつた。」「じゃあ私の家に掛かってきた電話は・・・？」

「君を誘拐したと勘違いしていたから、君の家に身代金を要求する電話が、掛かってきたんだろう。」

「・・・私に勘違いされて誘拐されたんだ・・・」 彼女はその話を聞いて、落ち込んでしまつた。

「大丈夫だつて。俺が絶対に、見つけ出すから。」 俺は、彼女を励ますようにそう言つた。

「ホント！？」 彼女は、期待するような眼差しで俺を見つめてきた。

「お、おう」 曖昧な返事をしてしまつた。

「ありがと、私も出来る限り協力するね。」 それだけ言つと、満面の笑みを溢した。

『安請け合いをしてしまつた』と俺は、その時思つた。解決出来ればいいが・・・。彼女の友人が誘拐されてから、1日が経つた。今この所、有力な手掛かりは掴めていなかつた。事件も難航している・・

・ 今日も【美紀】と一人で、事件を解決させようと、捜査を始めた。色々と、聞き込みをする内に有力な手掛かりを入手した。それは、女の子を連れ去つていく人物を目撃したと言う事だつた。そこで俺は、ある事を思い出した。

「あつ、そういえば」

「何?」 「俺の知り合いに、刑事がいる事すっかり忘れてた」

「へ? 警察に行つて何するの?」

「情報を聞き出すのさ。」 そう言つて一人は、警察署に出向いた。

「よつ、オッサン、久しぶり」

「何だ、【真治】か。つてかその呼び方はやめろよ。」 う見えても俺はまだ、二十八だぜ。」

「俺から見ればオッサンだよ」と言つて俺は、笑つた。

そのやり取りを見ていた【美紀】はキヨトンとしている。紹介を忘れていた・・・。

「紹介するよ。この人は、俺の親戚で鬼警官と呼ばれている 褐

田勇治さん・・・別名、オッサンな」 俺はそう言つとまた、笑つた。

【美紀】は頭を下げて 「初めまして」と短く答えた。「何だ、可愛い彼女を連れてきて、自慢か?」 茶化すように、オッサンが言つてきた。

「彼女じやねえよ」 そういうやり取りを見ていた【美紀】は俺を突つついた。『そつか・・・本題を、忘れる所だつた。』

俺はオッサンに誘拐事件の事について、簡単に説明した。すると、オッサンは驚いたように口を開けっぱなしにしていた。

「情報が欲しいんだけど、何か解つた?」 説明を終えた俺は、口を開いてそう言つた。「情報と言われてもな」 腕組みをしながら考えている様子だ。オッサンが考えていると、携帯が、鳴り出した。【美紀】の携帯だつた。彼女は、携帯に出て、何やら話している。電話が終わつたのか、携帯を切り、俺の方を向いてきた。

「誰から?」 「家のお母さんから・・・」「何だつて?」

「友達を誘拐した犯人から電話があつて、早くお金を、用意しろっ

て・・・用意出来なければ、命は無いって・・・「それだけ言うと、

【美紀】は崩れてしまった。今にも泣きそうだ。

一刻も早く、【美紀】の友人を助けなければ、ホントに、殺されてしまつ。取り敢えず、俺はもう一度、考えを巡らせて、考えてみた。すると、ある事に気が付いた。

『何故、犯人は誘拐した人物が、別人だと気付かないんだ?あれから、一日は経つていて。それにもかかわらず、何故未だに身代金の要求をしてくる?』『犯人が解つていないのも、事実・・・だが、解るのも時間の問題か。』そう言えば、誘拐された当日、【美紀】の友人は彼女の家の前に居たと言つていた。すると、【美紀】と何か約束でもしていたのか? そう疑問に思つた俺は、【美紀】に聞いてみた。すると彼女は、こう答えた。

「その日は、二人で遊ぶ約束をしてたけど・・・」

「他には何か、言つてなかつたか?」彼女は少し考えていたが、何かを思い出したかのように口を開いて答えた。「新しく彼氏が出来たから、紹介するつて・・・」やはり、手掛けりはゼロか・・・。途方に暮れてしまつた。取り敢えず日も暮れでいるので、彼女を家まで送つていき、俺も帰る事にした。誘拐事件が起きてから、数日が経つた。事件の進展は全く見せない。それどころか有力な手がありも掴めないまま、時間だけが過ぎていく。

『このままじゃ、彼女の命が、危ない。』そう思つた俺は、もう一度、事件を整理し始めた。

「事件当日、彼女は、【美紀】の家の前に居た。その時刻は、休日の午後だそうだ。【美紀】の家の前に居たのは、遊ぶ約束をしていたから・・・」『そこで彼女は、誘拐された。だが、いくら女の子でも、抵抗はするはずだ・・・そこで、ある答えに行き着いた。もしかしたら・・・俺は急いで携帯を手にとり、【美紀】のダイヤルをプッシュした。三コール目で、彼女は電話に出た。

『もしもし・・・』どこか不安げな声だつた。

「もしもし、俺だけ?・・・今大丈夫?」

「うん、大丈夫」 「誘拐された当田、【美紀】の友人が、彼氏を紹介するつて約束してたんだよな？」

「うん、そうだけど・・・」

「その彼氏の名前分かるか？」

「うん・・確かに、菅沼洋平つていう名前だつたけど」

「菅沼洋平か。分かった、サンキューな」 そう言つと俺は、電話を切ろうとした。

「待つて」 電話を切ろうとした俺に、【美紀】は急いで呼び止めた。

「何？」 俺は短くそう、答えた。

「何か解つたの？」

「解つたよ、解らないよ、まだ確信が持てないんだ。俺は、曖昧な返答をした。彼女は、短く

「そつか」とだけ答えた。電話は切れた。次に俺は、オッサンの所に電話を掛けた。ある人物について、調べて欲しい事があるからだ。そう。菅沼洋平に関しての事だ。俺は、オッサンに電話した。オッサンは一コール目で電話に出た。「電話に出るの、早いなあ。警察は、そんなに暇なんすか？」

「バカヤロー、こつちはそんなに暇じゃないんだよ」

「電話で大声出さなくとも、聞こえてるよ。相変わらずだな、オッサンは」

「で、用件はなんだ？世間話する為に、わざわざ掛けてきた訳じゃないんだろう？」

また、本題を忘れる所だった。

「オッサンに聞きたい事があるんだけど」 「何だ？」

「菅沼洋平つて奴の事調べて欲しいんだけど、出来る？」 「菅沼洋平？」 何処かで聞いた事のある名前だな。

「調べられるか？」

「俺を、誰だと思っていやがる。鬼警官だぞ。その位楽勝だ。」

「じゃあ、宜しく」 そう言うと俺は、電話を切つた。一時間後、オッサンから、電話が掛かってきた。俺は直ぐに、電話に出た。

「何か、解つた？」

「いきなり、その出方は無いだろ。躊がなつてないな」

「余計な事はどうでもいい。で、何か解つた？」

「おう」と一言言つてから、息を大きく吐いてから、次の言葉を口にした。

「菅沼洋平つて奴の事についてだつたな」俺は短く

「ああ」とだけ答えた。

「その菅沼な・・・前科があるぞ」「前科？」

「ああ、そうだ」「前科つて何したの？」

「詐欺だよ」「詐欺？」

「そうだ。誘拐と偽つて金を踏んだ来る詐欺だ。でも何で、そんな事が知りたいんだ？ 今回の事件とは、関係ないだろ」

「それが、関係あるんだよ。取り敢えず今から、迎えに来てくれるかい？」

「どうして、俺が迎えに行かなくちゃならないんだ」「事件を解決する為にだよ」

俺はそう言つて、不適な笑みを溢した。勿論、携帯越しだからオッサンには、分からないとと思うけど・・・俺は今、車の中に居る。約束通り、オッサンは俺を迎えてくれたのだ。

「で、お前さんみたいな素人がどうやつて事件を、解決するんだ？」オッサンは口を尖らせてそう言つた。

「心配しなくても直に事件は、解決するよ。現に、謎は既に解いているから、後は犯人を問い合わせて、白状させるだけさ」オッサンは驚いたように、

「何？」と言つてこいつを向いた。車が蛇行しながら道を、進んで行く。

「危ないから、前を向いて運転しろよな」注意したが、本人は聞く耳持たずで、更に口調を荒げて問い合わせてきた。

「何か分かつたつてのか？」

俺は、

「ああ」とだけ答えた。そうこうしている内に、目的の場所に着いた。緊張した空気が、流れる。重い口を開いて、オッサンが聞いてきた。

「なあ、事件の謎を解いたのか？」

「さつきも言つたろ。事件の謎は解いたつて。ヒントは電話で、オッサンが口にしてるよ」そう言つと、俺はうつすら笑つた。

「あの女子には、言わなくていいのか？」

「あの女子？ ああ、【美紀】の事か。」

「そうだよ。あの子、そうとう友達の事心配してたじやないか」

「あの子にはまだ、言わないよ。今、真相を知つてしまつたら、ショックが大きいだろうから・・・折りを見て、俺から話すよ。」

「そうか・・・」オッサンは、それだけ口にして、黙つてしまつた。俺たちが今、いる場所は、古びたアパートだ。そのアパートに、目當ての人間がいる。

アパートを見ている時に、人影が一人出てきた。

俺が探していた人たちだ。俺は、意を決して車の外に出た。それに続いて、オッサンも出てきた。一人揃つて出てきたので、二人は驚いたように、俺たちを見てきた。

先に俺が口を開いた。

「菅沼洋平さんですね？」

「そうだけど？」菅沼はそれだけ答えた。俺は、続けて言つた。

「最近起きた誘拐事件、知つてますよね？」明らかに一人とも、動揺している。

「知つてるけど・・・」菅沼はまた短く、それだけ答えた。一緒に居た女の子は、動揺しているせいか、こちらを見よつとはしない。

「貴方、前科があるんですね？」

「な、何が言いたいんだよ？」

「この間起きた誘拐事件、誘拐されたのは【美紀】って子じやなく、その友人なんです。」

「それがどうしたつて言つんだよ？」 「妙だと思いませんか？」

「何が？」

「その誘拐された女の子、貴方の隣に居る人なんです」何かを言いたそうだったが、それは許さなかつた。

「何故、今誘拐されている人がこの場所にいるのか、説明してもらいましょうか？」

「何を言つてんだ？コイツは、俺の彼女だ。誘拐される訳がないだろ。人違ひしてんじゃねえーの？」

「人違いか・・・そんなハズないですよ。彼女の写真、見せてもらいました。右目の中、ホクロがある。貴方の隣に居る彼女も、ホクロがありますよね？右目に・・・」「くつ！」「菅沼は、言葉に詰まつたようだ。

俺は、自分が推理したように、真相を他の人に話した。

「貴方は、前にも犯罪を犯している。それは、誘拐に見せかけた詐欺事件。」菅沼の顔が、青ざめていくのが俺にも分かる。俺は、続けて言つた。

「今回も、その事件同様、誘拐を偽つての詐欺事件。だけど、失敗したみたいですね。」

「じゃあ、以前の事件では、成功したから、今回もやるひつとした訳か？」

「そういう事。でも、そう簡単にはいかなかつた。彼女の両親が、不審に思つて【美紀】に、電話してたんですよ。だから、身代金の要求をしてきても、全く聞かなかつた。」

菅沼は既に、フラフラの状態だつた。俺は、菅沼の横に居る彼女の方を向いて、聞いた。

「あんたは、何故友人を騙す？【美紀】はあんたの事が心配だつたんだぞ。何故、そんな友人の事平氣で、騙せる？」

彼女は、重い口を開いて一言呴くようにして、言つた。

「お金が、欲しかつたから・・・既に彼女は、瞳に涙を溜めていた。白状したも当然だ。

「最低だな」オッサンは、そう吐き捨てた。菅沼が、不意に聞いて

きた。

「何故、俺達が、犯人だと解つた？」

俺は、大きく息を吸い、そして吐き出した。

「簡単な事さ。誘拐された当日、彼女は、【美紀】と遊ぶ約束をしていた。そこで、誘拐事件に巻き込まれた。」俺はそこで一息置きまた喋りだした。

「俺たちも最初は、そう思つていた。だが、実際は違つた。そもそも、誘拐されたら、声を上げて、抵抗するハズだ。女の子であつたとしてもな・・・。それに、誘拐された当日、彼女は、【美紀】に彼氏を紹介すると言つていた。それで、解つたんだよ。あんたらが共謀して、犯行に及んだつて事がな。」

「そつか・・・」菅沼はそれだけ言うと、俯いてしまつた。オッサンは、『行くぞ』とだけ言い一人を車に乗せて、車は走り出した。事件が解決した翌日、俺は【美紀】を近くの公園に、呼び出した。今日は、昨日と違い、澄みきつた青空が、広がつていた。公園の入り口から、こつちに向かつて歩いてくる人影が、見えた。【美紀】だ。彼女は、俺の前で立ち止まつた。

「よつ、大丈夫か？顔色悪いみたいだけど・・・」

「事件の真相だよね・・・？」彼女は俺の問ひには答えず、そう聞いてきた。全てお見通しのようだ。 「誰から聞いた？」

「藤森君の親戚の刑事さんから・・・」 「あのオッサンは余計な事を」 「事件解決したんだよね？」 「ああ、二人で今回の事件を考えたようだ。」

「そつか・・・」また元気がなくなつてしまつた。俺は彼女を励まそうとしたが、良い言葉が見付からず、あたふたしてしまつた。不意に彼女が、顔を上げて無理に笑顔を作り、『大丈夫』とだけ言つた。

それを見た俺は、無言で彼女を抱き締めた。その瞬間、彼女は溜まつていた物を一気に溢れ出したのか、俺の胸の中で泣いた。彼女は、泣き止んで俺の方を向いた。

「もう、大丈夫だから」今度は、ちゃんとした笑顔だった。彼女は、俺に丁寧に頭を下げるお礼を言い、また走り出した。かくして、俺が最初に体験した事件は、無事解決し一件落着という形で、幕を閉じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5964e/>

---

迷宮のストラテジー 1

2010年12月14日03時36分発行